

フルンボイルでの調査

—ハイラル、シン・バルガ左旗、エヴェンキ族自治旗を訪ねて—

広川 佐保

2002年8月中旬より、昨年度に引き続き、筆者と二木博史（東京外国語大学）、バイカル（新潟産業大学）、ナプチ（東京都立大学大学院）の4名は、トヨタ財団助成プロジェクト「満州国・蒙疆政権時代の内モンゴルに対する日本の啓蒙政策と内モンゴル人の対応」の一環として、フルンボイル市のハイラル区、及びシン・バルガ左旗、エヴェンキ族自治旗で調査を行った。

今回の主な目的は、文献調査を行うとともに、ノモンハン事件が生じた場所を見学すること、興安学院卒業生や日本支配時代を知る人に対して聞き取りを行うことである。なお、興安学院とは、満洲国時代、1935年にモンゴル人のエリートを育成するため、ワングーンスム（王爺廟、または興安、現在のオラーンホト）に設立された学校である。

清朝時代、フルンボイルはフルンボイル副都統の統轄下に置かれていたが、1911年ハルハで独立運動が生じた際、これに呼応して独立運動が生じた。中華民国とロシアのかけひきのなかで、フルンボイルは1915年、特別区域となるものの、ロシア革命後、中華民国の領土に組み込まれることになる。その後もフルンボイルでは、いくどなく独立運動が起きた。満洲国時代、フルンボイルは興安北省となり、ハイラルには興安北省公署が設けられた。1939年には省内シン・バルガ左旗領において、ソ連・モンゴル人民共和国と満洲国・日本とのあいだの国境紛争であるノモンハン事件が生じていた。近現代において、フルンボイルはロシア・モンゴル、中国、そして日本といった国があいだで大きく揺れ動いた地域であるといえよう。

現在、フルンボイルは、内モンゴル自治区のなかでも草原が多く残っている地域であり、そこでは牧民たちが遊牧を営んで暮らしている。筆者にとって、フルンボイルを訪ねるのは今回が初めてであるが、フフホトのモンゴル人から、フルンボイルの草原の美しさを何度も聞かされていたので、非常に楽しみであった。このように内モンゴルのなかで自然の残されたフルンボイルにも変化の波が押し寄せつつある。清末より民国時代にかけて、内モンゴル周辺地域では、盟旗制度を廃して省や県などの行政機関を設置していく動きが多く見られ、これがモンゴル人の反発を招いていた。現在の中国でもモンゴルの伝統的な行政区域の名称である「盟」を次々と「市」に変更しているが、こういった流れのなかでフルンボイル盟も2001年、フルンボイル市

へと変更された。通遼市や赤峰市とは異なり、フルンボイルという伝統的な名称が残っただけ、まだましなのかもしれないが、こうした施策に危機感を持つモンゴル人は少なくない。

筆者は8月9日、飛行機を乗り継いでフフホトに到着し、8月13日に他の3人と合流した。今回のハイラル旅行の案内役は、シン・バルガ左旗出身で内蒙古師範大学教授のソガル氏である。ソガル氏も我々とともにフフホトからハイラルへ向かうことになった。

8月14日、晴れ。

飛行機は朝7時にフフホトを出発した。飛行機からは緑の草原が見えるようになり、約2時間でハイラル空港に到着した。ハイラル空港は国際空港であるので、建物のなかにはキリル文字表記の案内も見られた。空港から車で5分ぐらい行くともうハイラルの町に入り、宿泊先の明珠賓館に到着した。この日のハイラルの町は非常に明るく晴れ渡っていた。ホテルに到着後、すぐにソガル氏の旧友による歓迎会がホテルで開かれ、食卓にはフルンボイル産のひつじや魚料理などがならんだ。

午後、聞き取り調査のために、さっそくモンゴル人のお宅を訪問した。最初に訪ねたドガルジャブ氏（1911年生まれ、91才）は、シン・バルガ左旗出身で、ハイラルで日本語を学んだ後官吏となるが、1936～1941年のあいだ早稲田大学に留学し、卒業後興安北省公署などに務めた。1945年8月以降、オラーンバータルで学び、1947年帰国している。1948年にフルンボイル盟が成立した後、ドガルジャブ氏はシン・バルガ右旗長、フルンボイル副盟長などを歴任された。氏にはフルンボイル自治政府についてお話を伺った。次に訪ねたブリヤート・モンゴル人のアビダ氏は、ブリヤートのアガ出身で、満洲国時代は満鉄に付属する学校でモンゴル人に日本語を教えていた。戦後、アビダ氏には『ブリヤート・モンゴル簡史』（ハイラル、1983年）や『ノモンハン戦争』（ハイラル、1988年）などの著作がある。

ハイラルでは、これからフルンボイル市主催のナーダムが開催されるそうで、街じゅうに色とりどりの旗がはためいていた。明珠賓館のすぐそばには新しくチンギス・ハーン広場が建設され、そこで夜ごと映画上映会やコンサートが開かれ、多くの人で賑わっていた。ハイラルの街では心なしかモンゴル語で話している人が多いように感じられる。

8月15日、晴れ。

午前中、フルンボイル市図書館へ出かけた。図書館では地方志や雑誌などを調査したが、古い文献はほとんど残っていなかった。一方、戦後出版され

たフルンボイル市関係の地方史などは比較的揃っていた。

午後はフルンボイル学院を訪問する。同学院は、1993年にいくつかの学校を統合して大学となり、1997年フルンボイル学院が成立したという。建物は最近新設されたばかりであった。フルンボイル学院では、モンゴル語学科主任でエヴェンキ族のセルーンバト氏達と「学術討論会」を行った。参加されたダグール人の先生のなかには、元興安北省長であったエルヘムバトの親戚もいた。

8月16日、晴れ。

朝9時半にシン・バルガ左旗へ出発する。バイカル氏は車の関係で後から出発することになった。出発はしたものの給油等で1時間ほど待たされる。フルンボイルではフフホトよりも時間の流れがゆっくりしていて、むしろモンゴル国と似ているように感じられる。ハイラルを出てエヴェンキ自治旗に入ると、ほどなくして草原があらわれる。途中の道路はかなり整備されているので、道があれば車はスイスイ進むが、時折、建設中のため通行止めとなる。そうすると今度はでこぼこの草原を走るはめになる。街を離れるに従つて草原が豊かになり、車から見える住居が固定家屋からゲル（移動式の住居）へと変わってゆく。

約3時間で我々はシネ・バルガ左旗の中心地のアムガランに到着し、旗招待所に宿泊する手はずをとった。アムガランは緑の草原のなかにぽっかり浮かんだような町で、煉瓦造りの家が立ち並び、工事のために町中の道路が掘り返されていた。気温はかなり高い。我々は旗政府招待所で政協職員の出迎えを受ける。昼食後、少し休息をとったが、そのあいだにナプチ氏のところには旗の公安がやってきて、我々が北朝鮮人かどうか調べに来たという。最近、北朝鮮の亡命者が内モンゴルを経てモンゴル国へと向かうケースがあるらしい。招待所は比較的清潔でお風呂もついていたが、通気が悪いようで昼間は熱がこもってしまう。夜遅くになってバイカル氏もアムガランに到着する。

8月17日、曇時々雨。

昨日ハイラルから戻った副旗長のマンドラー氏や、旗の政協職員の方が来られ、一緒に招待所で朝食を取る。これよりシン・バルガ滞在中は、ずっとマンドラー氏のお世話になる。その後、旗の経済関係の建物において、周辺に住むお年寄りたちから、満洲国時代の状況やノモンハン事件についてお話を伺うことになった。この日は約10名のお年寄りが集まってくれた。

その1人のジャンバスレン氏（1922年生まれ、80才）は、シン・バルガ

左旗の出身で、興安学院 4 期生である。ジャンバスレン氏は、1938 年興安学院に入学されたが、その動機は学院が遠いところにあり、好奇心があつたためであること、興安学院では朝日新聞を読んでおり、モンゴル語の新聞は読まなかつたこと、1943 年に日本へ行ったことなどを話された。氏は同学院を卒業後、長春にあつた大学に入学し、1945 年 8 月以降、フルンボイルの政府機関で勤務した後、教職に携わつた。ナブチ氏によれば、モンゴル人はジャンバスレン氏のように、遠いところへ憧れ、実際に行つてしまふことがよくあるという。

最高齢のデルゲル氏（85 才）は、警備軍の一員としてノモンハン戦争に参加したそうであり、その様子を話された。ジョンディー氏（1933 年生まれ）は、7 才のときにガンジョール廟のラマとなり、そこでチベット語のお経などを学んでいたといい、日本人から日本語を習つたこともあるという。お年寄りたちの多くはモンゴルの民族服であるデールを着用しており、そのなかの 1 人は、今日は一番いいものを着てきたと誇らしげに話されていた。

午後は、町のはずれにあるアムガラン第一小学校を訪問した。この小学校は、興安北省省長であったエルヘムバトにより 1926 年に創立された歴史のある学校である。当初はゲルの学校であったが、今は立派な建物になっている。校舎の一室には、学校の歴史を記した記録や写真、生徒の書いた絵などが展示されていた。今年、アムガラン小学校は 76 周年を記念して盛大に祝つたそうで、我々もその様子をビデオで鑑賞した。校長のバータル氏は、本當は 70 周年に創立記念事業を行つたかったが、予算の関係で 76 年になつてしまつたと話していた。アムガラン第一小学校はモンゴル人の小学校であり、寄宿舎はないという。学校の向かいにある小さな森は、満洲国時代（1938 年）に植樹された木々が育つたものだそうで、門前には「中日園林」という文字が記されていた。

学校を見学した後、町の中心まで歩いて戻つたが、町の周囲には草原が広がり、牛や馬が放牧されていた。その後、町のはずれの給水施設へ連れて行つてもらった。ここには、昔日本軍が作ったトーチカが残つていた。こうした建物は旗内にたくさん残されており、かなり頑丈にできつてゐるため、今でも倉庫として活用しているそうである。

8 月 18 日、晴れ。

午前、マンドラー氏たちとフルンボイルで名高いガンジョール廟へ出かける。アムガランからは車で 20 分程度である。ガンジョール廟は、18 世紀後半に建立されたバルガの名高い名刹であり、かつては数百人の僧侶がそこで生活していた。ガンジョール廟の法会は毎年盛大に開かれ、そばに定期市が

たち、相撲や競馬がおこなわれ、遠くから多くのモンゴル人が集まってきた。満洲国時代には、そこで満洲国政府機関による宣撫工作も行われていた。ガンジョール廟は、文革中の1966年8月にハイラルからやってきた紅衛兵に破壊され、山門だけが残されたという。最近、昔の写真をもとに修復が進められることになったそうで、廟内では職人達が作業を行っていた。当時の面影を残す山門はまだ修復されていなかったが、廟内の修復はかなり進んでいた。完成後はシン・バルガ左旗の観光地となるに違いない。廟内には臨時にゲルが設営され、そこに旗の職員が泊り込んで、工事を監督するとともにお布施を募っていた。我々はそこでお布施をして、領収書とパンフレットをもらった。ガンジョール廟の周囲の草原では、放牧された羊がのんびりと草を食んでいたが、あちこちに日本軍が建築したトーチカが地中から顔をのぞかしていた。

その後、我々はアラシャーン廟を訪ねた。そこで活仏であるルンドクジャムス氏（1928年生まれ）にお会いし、お茶と乳製品をご馳走になった。

昼食後、ノモンハン・ブルドという場所へ車で向かう。ノモンハン・ブルドは、アムガランより南に下った場所であり、ノモンハン事件の戦場、つまりモンゴル国との国境からすぐのところにある。ノモンハン・ブルド周辺は、川が流れ、草原が広がる美しい場所であった。あたりの住宅は木の塀で囲われているが、冬季に地面が凍結するため、塀はうねうねと波打っている。ナプチ氏によれば、このような風景は1970年代のシリンゴル盟の情景にそっくりだそうである。到着後、政府関係の建物の中にあるノモンハン戦争陳列館を見学する。館内では、ソ連側および日本側の朽ちかけた鉄かぶと、砲弾などが部屋の中心に置かれ、また壁際には地中からでてきた戦死者の所持品や入れ歯などが展示されている。備え付けのノートには日本人の名前が多く記されており、訪問者が多いことを知る。陳列館の裏手には、日本人の援助によって建設された真新しい小学校の建物もあった。

陳列館を見学後、国境付近に位置するノモンハン事件の戦場へ向かう。戦場跡付近には、中国政府の国境監視所が設けられており、すぐちかくの地面に砲弾で「和平」という文字が描かれていた。このあたりは一面草原で逃げ隠れできる場所もなく、蚊がたくさん飛んでいて体にまとわりつく。ここから遠くに見える山のあたりはもうモンゴル国であるというが、どこからがモンゴル国なのか、はっきりとわからない。そこからすこし離れた、柳が生い茂る、壅んだ場所に、戦死者が葬られたそうである。そこでは小さな白い骨が見られた。

我々はノモンハンをあとにして、ブルーベリーや山楂子、すももなどが生い茂っているという丘へ向かった。ここでは昔から木の実がたくさん取れる

のだという。すすめられるままにブルーベリーの実を少しかじってみたが苦かった。木の実を収穫し終えたあと、ノモンハンから東北の方向にあるウブル・ボラク・ソムへ向かう。

ウブル・ボラク・ソムには、町の規模にしては大きな小学校や、役所、旅館のほか、木の塀で囲まれた固定家屋が立ち並んでいた。夕方近くになると、犬の遠吠えが聞こえ、牛が町の中心へと向かってくる。これらの牛は町のなかで飼われ、昼間は周辺で放牧されているという。ナプチ氏によれば、町の人は本業を持っているので家畜を飼ってはいけないことになっているが、実際はみな飼っているという。過放牧の問題もあるので今後は禁止されるだろうとのことであった。

夜には長い宴会が開かれ、みんなで食卓を囲む。そこで食事はもちろん羊がメインであるのだが、町で見た冷凍食品と同じものもあり、ここまで流通が及んでいることを知った。ソムの職員のかたや近所の人も集まってきたが、シン・バルガ左旗のモンゴル人はみな体が大きく迫力がある。モンゴル人の体格のよさは肉食と関係があるというが、最近は以前ほど肉を食べなくなったためか、フフホトのモンゴル人の若者は年々華奢になっているという。宴会にはソムの青年達が来て、モンゴル国のロックバンド、ハランガの歌を歌っていた。この日はソム内の食堂付設の旅館に宿泊する。夜中、起き出して空を見上げると満点の星空であったが、まわりの家の犬が吠えたので早々に退散した。

8月19日、曇り時々雨。

この日はハイラルに戻る予定であったが、ちょうど近隣で結婚式があるので、それを見学していくことになった。ふたつの小高い丘に花嫁と花婿の親戚のゲルがそれぞれ設営されており、我々一同は花嫁方のゲルを訪ねた。そこで我々は花嫁を待つあいだ、羊やうどんなどをごちそうになり、VCDでモンゴル相撲を鑑賞したりして時間をつぶした。

花嫁とその家族が登場後、ソガル氏が花嫁に祝詞を述べ、礼もそこそこに我々はハイラルに出発した。ハイラルへ向かう道中、鉄線であちこちの草原が区切られており、遠回りを余儀なくされる。草原の草に害虫がいるのが目に付いた。ハイラルへ戻る途中、ナーダムから帰ってくる人たちと行き交った。この日は、イミン河のそばにあるフルンボイル賓館に宿泊した。

8月20日、晴れ、時々曇り。

この日は、フルンボイル市で民族事務の仕事をしているブリヤート・モン

ゴル人（以下、ブリヤート人）のトリト氏の案内で、エヴェンキ族自治旗シネヘン西ソムへ車で向かった。バイカル氏は別行動を取る。ハイラルからシネヘン西ソムへはおよそ1時間弱で到着する。シネヘン西ソムは、ロシア革命以降ブリヤートから移住してきた人たちが集まって暮らしている地域で、かつて南屯とも呼ばれた。

シネヘンでは、ジャムソー氏とドガルニヤム氏のおふたりにお会いした。ジャムソー氏（1926年生まれ、76歳）は、シネヘンから厚和の幼年学校へ行き、そこで学んだ後、軍官学校（2期）へ入学した。父親が陸軍の軍医松崎陽と親交があった関係で、1年間松崎の家に住み込んでいたという。ジャムソー氏も、遠いところへ行ってみたいという好奇心から、蒙疆へ行ったと話された。

ドガルニヤム氏（1918年生まれ、85歳）は、日本語でお話ししてくださいました。氏は1931年ロシア領内ブリヤートのアガからフルンボイルに来た。1938年にワングーンスムの興安軍官学校を卒業後、ノモンハン戦争にも参加し、そこで地図を作成していたという。1942年、相模原にある陸軍士官学校歩兵科へ入学し、1944年に卒業した。その後、ワングーンスムで特務関係の仕事をしていたが、日本の敗戦後ソ連の捕虜となり、ロシア語の通訳を行った。ドガルニヤム氏は、モンゴル語新聞『フフ・トグ』記者のダンザン氏と親交があったという。そのダンザン氏は、文革中に亡くなつたそうである。

その後我々は、ソム内のブリヤート人のお宅を訪問し、そこでお茶と自家製パン、自家製ジャムなどをいただいた。ブリヤート人のお宅では家具や調度品がどことなくロシア風であり、パンを出されることが多い。また、シネヘンのブリヤート人たちは、年齢に関係なくブリヤート式のデールを着用していた。シネヘンのブリヤート人は、草を刈って冬に備えるため、家の周囲には、アルガル（燃料に用いる家畜の糞）とともに刈り取った草がいくつも束にまとめられていた。昼食は、ソム長さんと一緒に近くにある食堂でボーズ（モンゴル風のパオズ）などを食べる。

その後、我々は車で元ソロン旗のオボーへと向かった。オボーは小高い丘の頂上にあり、丘の周囲は家畜や車が入れないように鉄柵で囲われていた。丘を登っていくと、オボーには色とりどりのハダック（儀式に用いる絹布）やお酒などが捧げられている。ここには全部で13のオボーが祀られており、二木氏によれば、これは13オボーと呼ばれる形式のものだそうである。オボーからは周囲の情景が一望できた。オボーのそばには、ツーリスト用のリゾート施設があり、モンゴル人のこどもが馬に乗らないかと客引きをしていた。

オボーを見学した後、エヴェンキ族自治旗の新華書店に立ち寄る。ここではかなり多くのモンゴル語の本が販売されており、二木氏は、ここのモンゴル人は結構モンゴル語の本を読んでいるのではないかと話されていた。

ハイラルに戻った後、ふたたびトリト氏の案内により、筆者と二木氏で興安学院4期生であるビリクバト氏（1923年生まれ、79才）のお宅を訪問した。氏はチチハルのフルジ鎮出身で、家は貧しかったという。興安学院卒業後、1943年新京の建国大学に進んだ。ビリクバト氏はいまも日本語を流暢に話され、以下のようなお話をしてくださいました。「興安学院の初代院長であり、ゴルロス前旗ジャサクで元興安総署総長のチメドサムピルは、漢語も日本語も話せなかった。チメドサムピルが院長であった頃、興安学院主任の青木英三郎は、我々モンゴル人に日本帝国主義を押しつけず、民族主義を教えたため、1-3期生のあいだで評価されていた。特務機関の金川耕作はモンゴル民族主義を禁止しなかったが、ハルハと統一することや共産党はだめであった。建国大学時代はマルクス主義の勉強をしていた」という。ビリクバト氏は学生時代、日本人の教官と衝突することが多かったという。日本の敗戦後、氏はモンゴル人民共和国の軍隊に入った。氏は数ヶ国語に通じていたため、日本の特務をたくさん逮捕したそうである。1946年にフルンボイル盟青年団書記を経て1947年の五・一大代表大会に参加した後、土地改革の工作隊長も務めた。現在はハイラルで日本の慰靈団の受け入れを行っている。

8月21日、曇り、時々雨。

この日は調査の最終日である。バイカル、ナプチ両氏は飛行機の関係で午前中にフフホトへ発った。筆者と二木氏は飛行機の出発が夕方だったので、それまで調査を続けることになった。

我々二人にソガル氏を加えた3人で、ホテルにて興安学院8期生のソルガルト氏（1927年生まれ、75才）にお話を伺う。氏はハラチン中旗出身であるが、やはり遠いところへ行きたかったため、故郷から遠く離れた興安学院に入学したそうである。1945年8月以降は、土地改革で故郷に戻ることができなくなったという。その後、1946年東北軍政大学を卒業し、フルンボイルにおいて長年教職に携わられ、最近『呼倫貝爾民族教育史略・上編』（民族出版社、2001年）を上梓された。ソルガルト氏は興安学院回想録の編集者のひとりであり、その漢語版（1999年）をいただいた。

その後、3人でハイラルの町をまわった。ハイラルの古い地図を頼りに、町の西北部にあった興安北省公署の建物を探した。興安北省公署があった場所には、現在、歌舞団の建物が建てられていたが、奥に公署の一部が残されているという。内部には古そうな白い建物があったが確認する術はない。

歌舞團をあとにして我々はハイラル駅へ向かった。ハイラル駅のすぐそばにある鉄橋の上では、ブルーベリーがたくさん売られていた。ハイラル駅は、20世紀初頭、東清鉄道敷設に際して建設された。現在用いられているハイラル駅舎は戦後のものであるが、すぐ右手に旧駅舎が残っている。かつてハイラル駅のすぐ前には、ハイラル特務機関長の寺田利光の銅像が置かれた寺田公園があつたが、今はそこにソ連軍による解放を記念するモニュメントがそびえ立っていた。

その後、町の西部にあったハイラル神社の跡地へ向かう。ハイラル神社跡は手洗所だけが残っており、現在は市政府の建物となっている。神社のそばにあった日本領事館は、戦後学校などに利用されていたが、現在は残っていないという。最近、ハイラルの町は開発が進められており、古い建物がどんどん取り壊されているが、建て替えはもともとあったロシア風建築の姿を模しておこなわれているという。

町を見学したあと、時間があまつたのでフルンボイル博物館へ出かけた。博物館にはダグール・モンゴル人のボー（シャーマン）の衣装や、手袋、ゆりかご、オオカミの剥製などが展示されている。建物の大きさの割に展示品はそれほど多くない。なぜか博物館のなかでブラスバンドが演奏の練習をしていた。ハイラルの町や博物館を足早に見学したあと、筆者と二木氏は北京へ戻るため、ソガル氏とともにハイラルの空港へ向かった。ハイラル空港では空港監視員にモンゴル人がおり、我々日本人がモンゴル語を話すのが愉快な様子であった。

今回の調査旅行では、内モンゴル大学のソガル氏や、シン・バルガ左旗副旗長のマンドラー氏を始めとして、多くの人たちにお世話になった。これに加えて、満洲国時代や蒙疆政権時代を生きたかたがたからも、非常に貴重なお話を伺うことができた。この場をかりて感謝の気持ちを述べさせていただきたいと思う。

（ひろかわ さほ：日本学術振興会特別研究員）